

この度、「寺院しおり」をPDFデータにて掲載させて頂くこととなりました。

このしおりは、寺院様のご協力を得て寺院の成立から今日迄の歴史を探り、又、寺院の景観、本尊、諸仏像、什物を一冊の本にまとめたものです。

この「寺院しおり」は寺院様のご協力により**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィスが製作しております。

お寺の歴史は地域の歴史と密接に関わり、その土地や歴史を知る大変貴重な資料であるという思いから皆様にもご覧いただけるよう公開させていただくこととしました。

スキャンによる作業を行ったため、必要な箇所をお読みいただくに際し、少々取り扱いにくいものもございますが、何卒ご了承下さい。多少なりともお役に立てていただければ幸いです。

※ PDF ファイルのリンク先はネットワークの状況により予告なく変更する場合があります。誠に申し訳ございませんがPDF ファイルへの直接リンクはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。

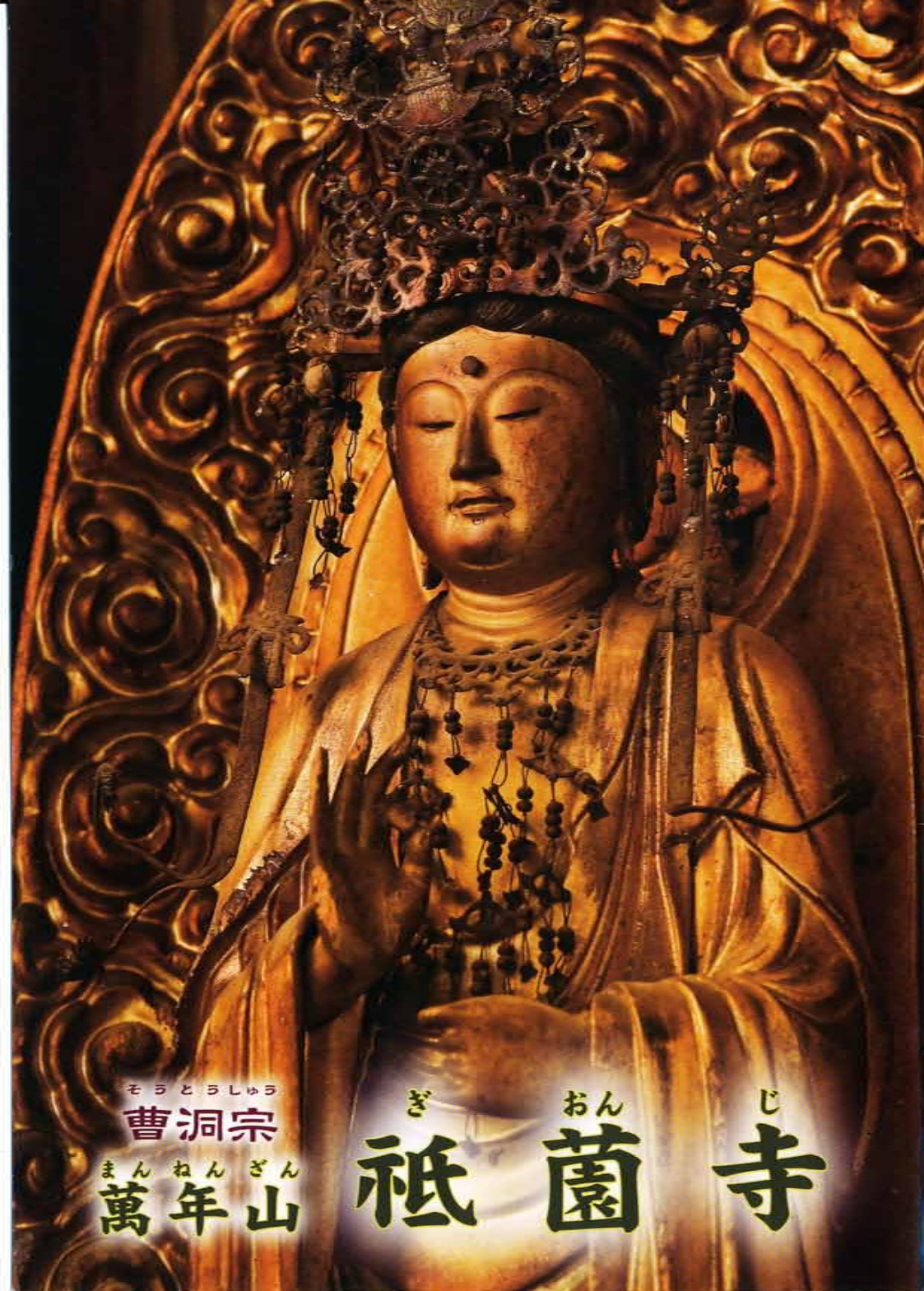
また、著作権等は放棄しておりませんので、掲載されている文章・写真の無断使用・転載などはご遠慮願います。

この「寺院しおり」PDF データは「**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィス」並びに「**いい寺.jp**」のホームページで掲載されております。

(有)光陽フォト・オフィス <http://coyo.jp>

寺院情報サイト**いい寺.jp** <http://e-tera.jp>





そらとらしゅう

曹洞宗

まんねんざん
萬年山

ぎ おん じ
祇 園 寺





山門左手前 当山三十三観音の一番観音



山門:左右に六道能化地藏、右前に「山門禁葷酒碑」が建てられている。



紙園寺入口の地蔵堂



安政2年(1855) 建立の苔むし

た本堂と山門。山門には「秋田県第十三番札所」の看板が掲げられている。



本堂前の無縁塔と地蔵堂

環境

大曲市街地より奥羽本線に沿って国道一三
号線(大曲バイパス)を南下する。旧羽州街
道である。慶長時代迄、二階堂氏が治めた
六郷の街に入ると左手に当山の本寺である
永泉寺が六郷湧水群の中にある。さらにこの
街道を四キロほど進むと「後三年の役」の舞
台となった横手市の金沢柵に至るが、その手
前、厨川を左折し、川添いに一・五キロほど
上流を目指すと深い緑に覆われた谷間に当山
の古い山門が現われる。一帯は清原氏の最後
の砦、源義家と戦った古跡である。その歴
史を秘めて金沢柵鎮守といわれ、当山は九百
年もの間ここに古色のままに苔むして行ん
でいる。



本堂(安政2・1855建立)

秋田三十三観音十三番札所

「平安時代、長久三年(一〇四二)六月のこと。地福長者、実父は清原真人光頼(清原武則の兄)の息子、大鳥井山頼遠(横手大鳥井山は清原の当時の居城か)の四男なり。その子保昌、実父は清原武道(字は貝沢三郎で『前九年の役』にも出陣している)の二男で出家して保昌坊と号す。諸国修行して紀伊国(三重県)熊野那智山に参籠して、観音の御利益により、西国三十三ヶ所を順礼して観音を大仏師定朝に作らせ、阿闍梨教圓法師に開眼供養せしめてその後本国に帰る。雄勝を始め、各六郡山々嶽々の寺院にその佛体、並

びに三十三所順礼記を書き奉納す。その後、都より阿闍梨教圓来り、同行して塩湯彦尊の座せる御嶽山の内湯の峰、白瀧の観音を第一番と定め、秋田郡比内の庄岩本山にて三十三番の札打ち納め、教圓法師帰京し給う」と、この文化圏が清原一族によって成立したことやを伝えると共に、享保十四年(一七二九)秋田城下鈴木定行と加藤政貞がこの道を歩き、この順礼記を確認し、新たに『観音巡礼記』を残している。それらによれば当山のことについては、

「第十三番 金沢村万年山祇園寺観音 古

書に金沢鍛冶屋敷金洗観音とあり、大佛師定朝作正観音なり。

八幡太郎義家公の城跡(金洗城又厨川城とも云えり)あるいは安倍貞任の城の跡に今、八幡の宮あり。鎌倉権五郎塚あり、矢立塚という。厨川の宿の内に流るる川あり、この流れに目半の河鹿あり、石の唐櫃あり、古跡多し。矢杭向城、兵糧籠置きしゆえ飯詰とも

いう。祇園寺に義家公の御直垂、御袈裟ありしというが、今は六郷の本寺永泉寺にあり。この寺、もと六郷伊賀殿の牌所なり」という。

〔御詠歌〕

わけゆけは 大悲の心 いやまして

湧出る水 金洗ひ沢

菅江真澄の見た祇園寺

文政九年(一八二六)五月、七十三歳の菅江真澄は『秋田藩地誌』編纂のために仙北郡に入り、祇園寺について『月の出羽路・仙北郡巻十七』の中で、

「万年山祇園寺、古来は天台宗派、今は曹洞家なり。開祖は直翁授性和尚、元和元年(一六一五)乙卯四月十四日遷化、十二世現住(独勇)巨真和尚という。正観世音菩薩円仁(慈覚)大師作、秋田三十三番札所なり。当寺開闢由緒古記録伝わらずして審らかならざるよしをいえり」

『出羽国六郡補陀洛巡拜田跡記』に前記の

文章を引用し、次のように続けている。

「この祇園寺はむかし金灌沢に在りしを、今の所に移せり。さりければ今も、金灌沢の寒泉を掛樋にとりて寺の用水とせり。寺はいと古い寺ながら退転せしことあり。そのころならむか、禅林に移りて今は曹洞宗なり。寺の由来知れる人なし。金沢という郷の名は金掘りうるよりいえる名にや。また金洗沢の流の省りをしか、いいならはして金沢の名はありけるものか、なおたづぬべし」

「ある物語に、六郷東根に嶋治郎某とかいしもの、将軍義家公の身方ともいい、安倍



境内南方から金沢古城柵に至るまでに三十二体の観音様が祀られている。天保(1830～43)の頃建立。

周辺の古跡

金沢柵

横手市金沢本町の南部丘陵にあつて、平地から頂上まで九一mがあり、崖に開かれた天然の要害で、平鹿・仙北二郡の平野の大半を望むことができる。

「後三年の役」(一〇八三〜八七)の時に源義家・清原清衡軍に対峙するために家衡と武衡が本拠地として沼柵より移り、立て籠った城柵で、孔雀城・金洗城・厨川城とも呼ばれた。それ以前も清原武則の居城であつたと思われる。飲料水は柵の東側の金洗清水よりとり、金洗沢は金沢柵の守護寺である祇園寺への通路となつてた。柵の搦手(裏門)から下り金洗沢に添つて大手門(正門)に至るところに祇園寺があり、柵の北東長に当り鎮守寺であつたと思われ、後三年の役の戦勝後に義家が柵に岩清水八幡宮を勧請して金沢八幡宮を寛治七年(一〇九三)に創建した時もその鎮護寺の役割を祇園寺は果たしていたと思われる。



本堂裏の庭園



後三年の役で清原一族が立て籠った金沢柵

閑居長根経塚群

当山の境内の北に老僧が隠居して住んだという閑居屋敷があり、この続きの閑居長根からは二基の経塚が発掘され、経筒と経蓋が三箇見つかつている。その内の一つは、元久三年(一一二〇六)銘のもので、明治四十一年(一九〇八)に発掘され、秋田県有形重要文化財の指定をうけている。石の中央に穴をうち、経筒を入れ、自然石を蓋とした、銅製の経筒で、蓋に和鏡(梅枝蝶鳥鏡)を転用している。高さ二〇・二cm、蓋の径一〇・二cm、針



閑居長根経塚群を背景にした本堂



元久3年(1206)銘の経筒の蓋・径10cm(県重文)

金銘で、

元久三年(一一二〇六)歳次丙午

四月五日



(梵字の篆師)

本聖人引西 大檀越浄国
金剛佛子 念阿 覺範 尚寛
福有 良賢

金氏施主 源 太夫

とあつた、という。しかし、発掘した時に金色の縁が付いた経巻は溪水で洗つてしまったため文字が溶解し消えてしまった。その経巻は金沢山八幡宮に、蓋は祇園寺に所蔵されている、と二十世順見師が書き残している。



金洗沢に通じる山道に十六羅漢が祀られている。大正末年建立。

祇園寺開山の時代背景

平泉の時代

源義家は「後三年の役」を私闘とみなされ、朝廷より何の恩賞もなく、家衡・武衡の首を路次に棄てて去って行った。清衡によって当地方は平泉文化圏に入り、清衡は美父の姓藤原を名乗り、中尊寺を建立し、『供養願文』の中で「前九年、後三年という奥羽の戦乱によって空しく戦死した幾多の冤霊を弔い、安楽浄土に導きたい」と記した。清衡は寛治年間（一〇八七〜九四）に、三男藤原朝臣小館三郎正衡に横手の地に中尊寺支院の天台宗明永山大義寺（現正平寺）を開基させている。平泉の栄華の前に金沢柵攻めで殺戮した地元の人々に対して贖罪の心に溢れていたのではなかろうか。

金沢城と領主たち

源頼朝によって平泉が亡ぼされ、山北（横手盆地・雄勝・平鹿・山本）に鎌倉御家人が

地頭として配置されて来た。

六郷に入部したのは二階堂氏で代々鎌倉幕府の執事を務めており、後に宗家三代行盛の三男行忠が在郷の名、六郷を名乗っている。平鹿に入部したのは松葉資宗で出家名を行円といい『新古今集』の歌人である。その二、三男、泰実・経宗が平鹿に住し、平賀と称した。雄勝に地頭職として入部したのは藤原泰衡を征した時の鎌倉御家人の小野寺道綱で祖は藤原秀郷（俵藤太）である。

平賀一族の主流が元寇襲来に備えて正安三年（一三〇〇）ごろ安芸国（広島県）高屋保の地頭として防御の任を与えられ延文四年（一二五九）に平賀貞宗が最後の惣領を務めたものの、平鹿での勢力が弱まったことにより、秋田城之泰長が観応元年（一三五〇）に舞獅子並吉田・飯詰・八幡の三ヶ庄を明江山神宮寺遍照院に寄進したほどの勢力をこの地に保っていた。

応永十八年（一四一一）に三戸南部十三代



左脇侍：普賢菩薩 中尊：釈迦牟尼佛 右脇侍：文殊菩薩（安政5・1858年仏師左京作）

守行が秋田城之介安東鹿季と山北郡で戦い南部が勝利した勢いで守行の三男彦六郎（南部三郎とも伝わり、やがて久慈姓を名乗り津軽為信の祖となる）を永享四年（一四三二）（又は長祿二・一四五八年）に金沢城に置き、金沢右京亮を名乗った。その時の菩提寺が真言宗時代の祇園寺であった。久慈一門の米沢甚四郎を大曲代官にするなど南部の勢力下にあった。さらに、長野（中仙町）、淀川（協和町）も南部が領有し、三又城（稲川三又）の小笠原氏も南部氏系であった。このルートを通って寛正六年（一四六五）南部は十八代時政の代に將軍足利義政に貢馬の進上をし、將軍家から羽州の地の安堵を願った。しかし、この目論見は小野寺泰道とその臣佐藤忠経により破られ、南部は一挙にこの地を去ることになってしまった。南部による金沢城支配は永享四年から寛正六年迄の三十四年間であった。小野寺氏はこの勝利により出羽守護職となり、京都姉小路高倉に居館を構え、將軍の「御目見え以上の直勤御家人」となり、嫡子の教育の場とし、戦国大名の地位を固めていった。



借景も映える本堂広間



十六羅漢の二体

年(一五九四)の『中郡領地上り状』の中に金沢前郷村について、「金沢前郷ノ内 金沢旧領 湊兵庫介殿(六郷政乗) 代官支配之八百式拾参石天下様(秀吉)へ御上納 金沢本領也 六百七



聖観世音菩薩(天保3・1833年施入)

天正時代(一五七三〜九二)輝道は嫡子孫十郎義道を横手城に、父の弟、孫三郎道秀を金沢城に入れて金沢道秀を名乗らせている。道秀は『小野寺系図』では金沢弥三郎または金沢孫七とも記され、『戸沢家譜』では金沢の世襲の名、権大夫とある。

開山前夜の金沢

祇園寺再興開山

泰道は初めて横手城主となり、横手の明永山大義寺を、開基の藤原正衡の名をとり、曹洞宗大義山正平寺と改宗・再興開基殿となり、小野寺宗家の菩提寺とした。長禄二年(一四五八)のこととされる。一説によるとこの年代には泰道はまだ南部三郎の麾下にあったともいう。



達磨大師(嘉永4・1851施入)



大権修理菩薩(嘉永4・1851施入)

『小野寺正系図』によると、

《泰道(長禄二・一四五八年、南部三郎の為に幕下に属し、その後佐藤忠経の智謀を以つて、応仁二・一四六八年、南部に打ち勝ち、再び山北の本城に住す)―景道(明応四・一四九五年、常州小田原合戦のため打死)―晴道(景道の弟、故あり家を継ぐも後入道する)―稚道(植道又は惟道、父景道に従つて京で將軍家に奉公し、その後、晴道の跡を継ぎ下国して山北横手に居住する。天文十五・一五四六年生害なり)―輝道(幼名四郎丸、横手城主)―義道(横手城主、徳川により改易され石州の配所で没)》

領主を被官とし、由利十二党を従え、南接する最上領間室を侵略し、領内にあつては小野城主(雄勝小野)姉崎氏や湯沢城代三春氏を誅殺するほどに横暴をきわめた。そのため家臣であつた横手平城の大和田佐渡守光盛や金沢の八幡宮別当と真言宗系祇園寺の住職を兼ねていた役氏金乗坊らの反感を持つものたち

の反乱を引き起こし、稚道は湯沢城に追い込まれ、天文二十一年(一五五二)(又は天文十五年)七月、自害させられた。しかし、三年後、稚道の子、四郎丸(輝道)は庄内(羽州飽海郡の大室寺出羽守武藤氏に身を寄せ、三年後の弘治元年(一五五五)、羽黒山の衆徒(天台宗系)や庄内・由利、さらには先に金乗坊らに覚した大曲の前田薩摩守・楢岡三郎・六郷兵庫父子・堀田治郎丞・本堂六郎等を味方につけ金乗坊と大和田佐渡守を討ち、再び横手・金沢を支配し、四郎丸は輝道を名乗つた」という。この奪回戦の時に金沢城の直下にあつた祇園寺は焼失している。



童駄尊天

小野寺宗家の義道は天正十八年豊臣の「小田原征討」軍に参陣し、同十九年の「九戸の反乱」、文禄元年(一五九二)の「朝鮮出兵」のために肥前(佐賀県)名護屋にも布陣し、豊臣政権下で、天正十九年正月に「出羽国山北之内上浦郡三分二、三萬千六百石」を宛行

れている。この時雄勝郡は最上へ、湯沢・増田地方や上浦郡の浅舞・鍋倉などのその他の領は秀吉の直轄地ということであつた。

天正八年(一五八〇)ごろ、金沢道秀には嫡子がなく、隣地の六郷兵庫介政乗の弟、権之助光長(権十郎)が入婿し金沢城主となつて

石」や「金沢長岡むら(金沢寺田村)、石神寺田 茨島 野際むら 金沢領へ 四百拾七石」とあり、既に金沢は小野寺氏支配から脱し六郷氏支配になつていたことが知られる。その他に六郷氏は神尾町・久米・戸時の豪族も従臣としていた。その領土を「仙北中郡六郷兵庫領」といった。

その後、小野寺義道宗家は慶長五年(一六〇〇)、「関ヶ原の合戦」の前哨戦で最上義光への反撥から、かつて山北の検地に来た上杉景勝の重臣直江兼統を頼り豊臣方に従い、最上、秋田、六郷らの連合軍と戦い敗れてしまった。領民は義道がせて代官となることを願つたが、徳川の命により領地没収、義道はわずかの家臣と共に慶長七年



釈迦誕生佛
(明治9・1876年施入)

(二六〇二)、石見国(島根県)へ流され没落してしまった。

一方、六郷政乗は関ヶ原合戦で徳川方につき、上杉攻めを行ない、小野寺を攻め、慶長五年(二六〇〇)十一月、家康と秀忠に謁見し、慶長七年、家康の命により常陸府中へ一萬石で移封となった。

金沢の城は、慶長七年佐竹義重の六郷入部により、東将監・梶原美濃が受けとり、元和八年(二六二二)廃城となった。小野寺の残党はこの地方に残り、六郷氏や佐竹氏に対してしばしば一揆を起したが最後は「鬼の義重」の異名を持つ佐竹義重に鎮められている。くしくも佐竹の祖は後三年の役でこの地で戦った新羅三郎義光である。金沢氏は六郷政乗に従い臣として府中へ、元和九年(二六三三)本多正純の改易後、六郷政乗は二萬石となり再び出羽の地本荘に居を移した。



左：太祖常済大師瑩山禪師 中央：開山直翁授性大和尚 右：高祖承陽大師道元禪師。前に歴住の位牌



延命地藏菩薩(明治9・1876年施入)

祇園寺曹洞宗開山は

永泉寺二世

当山は清原一族が金沢柵を構築し、その時代に「羽州三十三観音札所」を保昌坊が定めて訪れたとすればその年代、長久三年(二〇四二)に金沢柵大手門下にあり、清原一族の祈禱寺であった。菅江真澄によれば天台宗であり、山号名は「萬歳山」と称したと伝わり、その後、柵の中に金沢八幡宮が源義家が岩清水八幡を勧請して建立され、その別当寺になったという。現在地の「寺の沢」も当寺の寺域であったのか、閑居長根経塚から、経筒の施主に元久三年(二二〇六)の記年銘と源の姓が入ったものが出土している。



本尊前立 合掌釈迦牟尼佛

金乗坊を亡ぼした小野寺一族は代々曹洞宗を外護し、雄勝・平鹿地方に多くの曹洞宗寺院を開山している。
又、金沢城に養子入りした権之助光長の六郷氏代々も曹洞宗で、その菩提寺は龍雲山永泉寺であった。
永泉寺は二階堂系久米氏の出自を持ち、飯詰に生れ、大本山總持寺四世峨山韶領の十六



子安地藏菩薩(安政4・1857年)

哲、正法寺三祖道叟道愛禪師(示寂永和元・一三七五年)が文和四年(一三五五)に真言宗宝珠院を改宗し、曹洞宗として開山した寺院である。幾度か法脈が跡絶えたこともあったが、道叟禪師が奥羽の第三の本寺江刺郡岩手県奥州市)の大梅拈華山円通正法寺の二祖月泉良印禪師(示寂応永七・一四〇〇年)を補佐し、曹洞宗の教線を弘げる途に開山した胆沢郡金ヶ崎の報恩山永徳寺の十世廣山東菊大和尚(示寂享祿元・一五二八年)を中興開山としている。

つた寺院を曹洞宗に改宗し、「萬歳山祇園寺」から「萬年山祇園寺」と山号名も改めて再興し、開山している。
開山の年月については記録は残されていないが、六郷領主、六郷政乗の弟、権之助光長が入婿し金沢の領主になった天正八年(一五八〇)頃のことであった(一説に慶長年代ともある)。
その時の開基殿、大檀越は金沢権之助であったと思われるが、徳川の改易により二階堂氏と金沢氏が共に、慶長七年(一六〇二)国替えにより常陸に、その二十年後、永泉寺と共に本荘に移るに及び、祇園寺は新たな藩主、佐竹氏のもとで地域の檀信徒のための寺院となり、藩政時代を過ごしたと思われる。

藩政時代以後の祇園寺

- ・享保十四年(一七二九)、長久年代(一〇四〇〜四四)に保昌坊によって選定された「羽州三十三観音」が長い年月により忘れ去られていたものを、秋田城下の住人鈴木定行、加藤政貞の兩人により改めて「出羽国三十三所巡礼札所並縁起」が著わされた。祇園寺は十三番で大佛師定朝作の正観世音菩薩が祀られていると記されている。
- ・文政九年(一八二六)五月、菅江真澄が十二世独勇巨真代に当地方を訪れ、祇園寺について記述している。
- ・文政十一年(一八二八)四月二十一日、法華経八巻施入。
- ・天保の頃(一八三〇〜四三)、当山の秋田三十三観音を第一番として山門前に祀り、境内南方の古柵に続く山の中腹に、右佛の三十二体を安置し「三十三観音」とした。
- ・天保三年(一八三三)五月十七日、厨子入観世音菩薩像施入。
- ・天保十五年(一八四四)七月二十八日、道

- 元禪師像施入。
- ・嘉永四年(一八五二)十月五日、大権修理菩薩・達磨大師像施入。
- ・安政二年(一八五五)、本堂が焼失していたが十三世中興透應秀関大和尙代に再建立された。この時の文書に「祇園寺は元真言宗にして金沢家の祈願所なりしに暫く廃寺となり、後六郷家の菩提寺となる永泉寺に属し、再興して禪宗となれり。而して秀関の時、堂塔火災に罹り、旧記什物悉く灰燼に帰せり」とある。山門も同時期に建立されたと思われる。
- ・安政四年(一八五七)八月二十八日、子安地藏菩薩像施入。



十六善神図(明治9・1876年施入)



釈迦涅槃図(文政5・1822年作)



十六羅漢図二幅の一
福寿園南山画(昭和2年作)



大般若経(貞享2・1685年銘)

- 本尊には大佛師左京の銘がある。
- ・明治八年(一八七五)七月七日、大般若波羅蜜多経六百巻施入。
- ・明治九年(一八七六)一月二日、金銅製釈迦誕生佛・延命地藏菩薩・草駄天像、釈迦涅槃図(文政五・一八二三年作)・十六善神両軸施入。
- ・明治十八年(一八八五)、寶頭感尊者像施入。
- ・明治十九年(一八八六)、地藏菩薩像施入。
- ・大正末年頃、祇園寺から金沢柵の金洗清水や本丸に通じる道ばたに石佛十六羅漢を祀る。
- ・昭和十六年(一九四一)、当山二十世忍海順晃大和尚が、仙北部西仙北町の天台宗寺



位牌堂

院小杉山圓満寺を、寺山号はそのまに曹洞宗寺院として准法地開山、昭和五十六年(一九八一)法地開山とする。



現住職 祇園寺第二十二世 忍然亮 俊
〒〇一九一―三三三
秋田県横手市金沢字寺ノ沢十六
TEL 〇一八二―三三七―二六二二

*表紙・厨子入り観世音菩薩。定朝作の正観世音が失われ、この像を秋田三十三観音十三番の観音様として祀る。